糖尿病　性生活④

注射の効果 6年で薄れる

長野県の会社経営、川岸義造さん(72)＝仮名＝は00年3月、長野赤十字病院（長野市）の天野俊康医師を訪ね、ずっと悩んでいた勃起不全（ED）の原因が糖尿病にあることを知った。だが、副作用の関係で治療にバイアグラを使うことはできなかった。

「バイアグラを使うことはできません。でも、ほかにも治療法はあります」

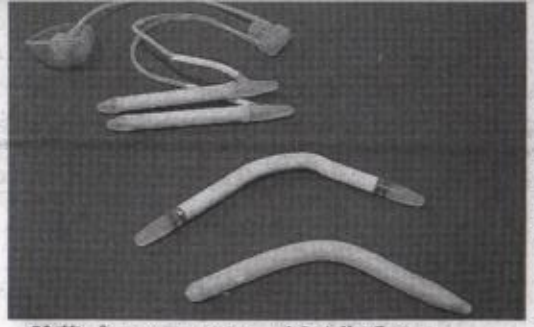
天野さんに説明され、川岸さんは、陰茎の海綿体に血液を流れ込ませる薬剤を注射して勃起を促す「陰茎海綿体注射」を受けることにした。

ただし、糖尿病が進んで陰茎の血管機能が壊されてしまっていると、この方法では効果は望めない。

薬剤を注射して数分。通常なら効果が表れてもいいはずだが、陰茎はピクリともしなかった。

「やっぱりだめか」

あきらめかけたおよそ1時間後、川岸さんの陰茎に久しぶりの硬さがよみがえった。



陰茎プロステーシス。折り曲げて使うタイプ（手前）と、空気を送り込んで膨らませるタイプがある

勃起がすべてではないと頭ではわかっていても、うれしかった。「古い言い方かもしれませんが、男の自信を取り戻したように感じました」

その後しばらく、この方法を川岸さんは続けた。ただ、たまった血液の逆流を防ぐため、陰茎の根元に付けるリングには、どうしてもなじめないでいた。

6年ほどして、川岸さんは再び勃起力の低下に悩むようになった。糖尿病が進行し、注射の効果が薄れたのだ。

再び相談した天野さんに勧められたのは、陰茎プロステーシスと呼ばれるシリコーンの「支柱」を陰茎内に埋め込む手術だった。

天野さんの紹介で、川岸さんは東京都大田区の東邦大学医療センター大森病院の永尾光一・准教授（泌尿器科学）を訪ねた。

永尾さんも、川岸さんの前向きな気持ちに応えたいと考えたが、問題があった。普段の血糖値の指標であるヘモグロビンA1cの値が8％前後と高いことだった。このままでは、手術しても傷がすぐ化膿してしまう恐れがあった。

陰茎プロステーシスの手術は保険がきかず、患者の自己負担は70万円から場合によっては100万円を超える。解決できるはずのリスクを抱えたまま、ゴーサインを出すわけにはいかなかった。

「まず血糖値を下げる必要があります」。永尾さんは川岸さんに告げた。

■ご意見・体験は、〈メール〉iryo@asahi.comへ。

糖尿病　性生活⑤

手術受け、生きる意欲再び

糖尿病による勃起不全（ED）の治療として、陰茎海綿体注射が効かなくなった長野県の会社経営、川岸義造さん(72)＝仮名＝は、陰茎にシリコーンの「支柱」を埋め込む陰茎プロステーシスの手術を勧められ、東邦大学医療センター大森病院（東京都大田区）を紹介された。だが、そこで、「まず血糖値を下げる必要がある」と言われた。

食事の総カロリーを抑え、できるだけ体を動かすように努めた。今年4月、普段の血糖値の指標とされるヘモグロビンA1cを7・5％まで抑えた川岸さんは、同病院の永尾光一・准教授（泌尿器科学）のもとを再訪した。

「この値なら、問題はないでしょう」

翌日、手術を受け、約1週間後に抜糸し、退院した。しばらくは風呂には入れずシャワーだけで、最低でも2カ月間は陰茎を使ったセックスはできない。

5月。術後初めての検診にやって来た川岸さんに、永尾さんは笑顔で告げた。

「今のところ、特に問題はありません。順調ですね」

ただ、心配なのは手術の傷の化膿だ。血糖値が高いままだと、傷が治りにくく、感染もしやすい。「ヘモグロビンA1cをできれば7・0％に落とせるよう、さらに努力してください」と注文することも忘れなかった。

糖尿病が原因になっているEDの治療に血糖管理は欠かせない。高血糖によって、神経や血管が傷んで、勃起に必要な血流の仕組みがいったん壊されてしまった場合、回復するのは難しい。だが、血糖をきっちりコントロールすれば、それ以上の悪化を食い止めることはできる。さらに網膜症や腎症、動脈硬化、心疾患など、ほかの合併症を予防することにもつながる。

川岸さんは、糖尿病とこれまで以上に真剣に向き合う覚悟を固めた。

入院した1週間で体重は3キロ減り、現在は82キロになったが、さらに80キロまで落とすのが目標だ。

大学を出てから、仕事に家庭に、常に走り続けてきた。だが、EDが深刻になり、性生活に自信がなくなると、すべてに前向きの姿勢がなくなってしまっていた。

手術を受け、生きる意欲が再びわいてきたのを感じる。

「この治療を選んで、本当によかったと思います」

（文、写真・田之畑仁）

術後1カ月で川岸義造さん（手前）は再び永尾光一・准教授を訪ねた＝東京都大田区で

■ご意見・体験は、〈メール〉iryo@asahi.comへ。